# ふるさとのために活動する学生の特質について ～「愛着」,「誇り」,「避けたい」感情に着目して～

西上広貴[1]・上月康則[2]・山中亮一[3]・尾野薫[4]・平川倫[5]

[1]学生員　徳島大学大学院先端技術科学教育部（〒770-8506徳島市南常三島町2-1，E-mai:c501631014@tokushima-u.ac.jp）
[2]正会員　博士（工）徳島大学環境防災研究センター（同上，E-mail:kozuki@tokushima-u.ac.jp）
[3]正会員　博士（工）徳島大学環境防災研究センター（同上，E-mai: ryoichi_yamanaka@tokushima-u.ac.jp）
[4]正会員　博士（工）徳島大学大学院理工学研究部（同上，E-mail: kaoru_o@ce.tokushima-u.ac.jp）
[5]学生員　徳島大学大学院先端技術科学教育部（同上，E-mai:c501301015@tokushima-u.ac.jp）

大学院生を対象としたアンケートより，ふるさとに対して「避けたい」，「貢献意欲」，「リラックス」の3つの意識の因子を抽出することができた．このうち，活動することと最も強い相関にあったのは，「貢献意欲」であった．また，「貢献意欲」を高める起因となる感情としては「愛着」と「誇り」であるが，両者の意味やその意識の持たれやすさなどは全く異なっていた．「誇り」に思われやすいものは，他にはない地域の特色がより強調されたものであった．「誇り」の原因となる要素から行動に至るまでの過程を，モデル化したところ，行動の起因は賞賛されることであった．つまり，ふるさとが賞賛されることで，誇りに思う気持ちが生まれ，それが地域への貢献意欲を向上させ，ふるさとでの活動につながることを示唆することができた．

**キーワード:** *ふるさと意識，愛着，誇り，活動，グラフィカルモデリング，共分散構造分析*

## １．緒論

### (1) 背景と目的

少子高齢化過疎が進行し，存続が危ぶまれる地域も多くなってきている．そういった地域では，地域外からの支援が必要とされ，特に大学生などの若者のボランティアといった活動支援が求められている．

そこで，「どうすれば地域のために活動する学生を増やすことができるのか？」という問いに答えるために，昨年度，大学院生にアンケートを行い，分析を行ったところ，活動に至る，感情，意識，意欲からなる構造モデルを作成することができた[1)]．具体的には，ふるさとへの「愛着」，「誇り」といった感情がふるさとは「守るもの」，「育むもの」といった意識を醸成し，ふるさとのために「活動したい」，「負担してもよい」といった意欲を育み，活動（「活動している」，「活動する仲間がいる」）へつながっていることを示した．

本研究では，この成果を受けて，活動の緒となる感情に着目し，「愛着」と「誇り」を持つ要因を把握することを目的に，新たに大学院生を対象にしたアンケート調査を行い，解析，考察を行った．

### (2) 本研究の流れ

本研究では，次の2つの検討を行った．一つ目は，ふるさと意識と活動することとの関係について，二つ目は，「誇り」，「愛着」の関係を明らかにした上で，「誇り」の原因となることを起点とする活動への構造を，パス解析，共分散構造分析で検討した．

## ２．調査解析方法

### (1) アンケートの方法

アンケート調査は，2017 年 6 月に徳島大学大学院生である機械創造システム工学コース，建設創造システム工学コースの 1 年生を対象に実施した．アンケートの有効回答者数は 89 人であった．質問項目の概要は以下の **表-1** に示す．問 1～6 までは「誇りについて」の項目，問 7～18 までは「ふるさとについて」の項目，問 19～21 までは「地域活動意欲」に関する項目，問 22 は「愛着の要素について」の項目である．

**表-1**　アンケート内容

| 問 | 質問項目 | 回答方法 |
|---|---|---|
| 1 | 「○○を誇りに思う」というとき，「誇り」，または「誇りに思う」という言葉の意味に相応しいと思うもの全てに○をつけて下さい． | 複数選択 |
| 2 | あなたは「誇り」に思うものはありますか？ | 2 択 |
| 3 | 具体的に「誇り」に思うものは何ですか？あて | 複数 |

| | はまるもの全てに○をつけてください. | 選択 |
|---|---|---|
| 4 | それらがあなたの「誇り」になった原因として，あてはまるもの全てに○をつけて下さい. | 7件法 |
| 5 | 「○○を誇りに思う」ようになって，次の気持ちを感じるようになりましたか? | 7件法 |
| 6 | 「○○を誇りに思う」ようになって，実際に始めたことはありますか?あてはまるもの全てに○をつけて下さい. | 複数選択 |
| 7 | あなたの「ふるさと」はどれにあてはまりますか?一番適切だと思うものに○をつけて下さい. | 一つ選択 |
| 8 | あなたにとっての「ふるさと」はどこですか?具体的に地名，場所，山川森海町などを記入ください. | 自由記述 |
| 9 | 問 8 の場所をあなたが「ふるさと」と思うようになってから，以下のことを感じるようになりましたか? | 7件法 |
| 10 | あなたは就職するなら「ふるさと」が良いですか? | 7件法 |
| 11 | あなたは「ふるさと」で暮らしたいと思いますか? | 7件法 |
| 12 | あなたは自分の「ふるさと」をたくさんの人に知ってもらいたいと思いますか? | 7件法 |
| 13 | あなたは自分の「ふるさと」の話を友人としますか? | 7件法 |
| 14 | あなたは「ふるさと」のために，実際に何か活動をしていますか? | 7件法 |
| 15 | あなたは「ふるさと」のために，何か活動をしたいと思っていますか? | 7件法 |
| 16 | 共に「ふるさと」のために，何らかの活動をする仲間はいますか? | 7件法 |
| 17 | あなたにとっての「ふるさと」の位置付けについて教えてください | 7件法 |
| 18 | 「ふるさと」を欲しいと思いますか? | 7件法 |
| 19 | 地域でのボランティアなどの社会的活動に参加したい | 7件法 |
| 20 | 住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい | 7件法 |
| 21 | 地域のみんなと何かすることで，自分の生活の豊かさを求めたい | 7件法 |
| 22 | 次の中で「好き」，「愛着」に思うものがありますか?当てはまるものすべてに○をつけてください. | 複数選択 |

### (2) 解析方法

本研究ではアンケートのデータを用い，解析を行った．３章では，統計ソフトSPSS Text Analytics for Surveysを用いて因子分析（最尤法・Promax回転）とクラスター分析（Ward法）を行った．３章，４章では，グラフィカルモデリングソフト「エクセルGM1.8β」[2]を用いてパス解析(GM)を行い，さらに，統計ソフトAmos 5.0を用い，共分散構造分析(SEM)を最尤法で行った．

ここで，パス解析と共分散構造分析の関係について触れておく．どちらの分析も項目間のパス図を作成する分析であり，得られるパス図の適合度指標の基準値を満たす必要がある．その適合度を判断する基準として，RMSEA＜0.05，GFI≒1，AGFI≒1，RMR≒0であると適合度が高いと一般的に言われている[2]．また，AICは2つ以上のパス図を比較する時に用いる指標であり，AICが低い値であるほど，良いモデルであるとされている．

共分散構造分析は分析者が先ず，仮説のモデルを書き，そのモデルの適合度を後から計算させる．こうした性質から分析者の自由にモデル図を書けるのだが，欠点として無数につながり方が考えられるモデル図の中から，適合するモデルを探すのが煩雑であることがある．そこで，その対策として，観測変数間の因果関係をモデル化する，グラフィカルモデリングという手法がある．相関係数表のデータから，探索的に最適なパス図を作成する手法であり，観測変数間のつながりを視覚的に理解することができる．その一方で，パス図の矢印に併記されるパス係数（編相関係数）の値が実際には正の影響が作用しているにも関わらず，負の値になることがしばしばあるので注意が必要である．例えば，パス図の中に影響力の強いパスが存在すると，弱い影響のパス係数が負の値になる．したがって，グラフィカルモデリングによって得られたパス係数の過剰解釈にあたっては，その妥当性をチェックする必要がある．その一方で，共分散構造分析で表記されるパス係数（標準編回帰係数）は正負の意味は確かであり，パス係数から作用の方向と影響度をみることができる．

## ３．「ふるさと」意識

### (1) 「ふるさと」のために活動する学生

ふるさと意識を検討する前に，「ふるさと」とはどのような地域か明らかにする必要がある．そこで，**表-1**の問8でふるさとだと思う場所を自由記述で具体的に聞いた．

その結果から，ふるさとと思う地域の規模を自由記述から判断すると，県の大きさで認識している学生は14人，市の大きさでは41人，地区では22人と判断された．徳島県内と県外で比較すると，ふるさとが徳島県外にある人は61人，県内にある人は16人であった．学生の多くは，ふるさとの機微を市域と捉えていることがわかる．

**表-1** ふるさとの規模と距離

| | 地区 | 市域 | 県 |
|---|---|---|---|
| 徳島県外 | 16人 | 35人 | 10人 |
| 徳島県内 | 6人 | 6人 | 4人 |

次に，ふるさとをどのような定義で捉えているのかを検討するために，**表-1**の問7でふるさとに当てはまるも

のの回答を解析した．その結果，まず，ふるさとが無いと答えた学生はいなく，90%の学生が「ふるさと」は「生まれ育った場所」と答えた．他にも14%が「生まれた所と違うが，住んでいた場所」，2%が「田園風景，農村，田舎などのイメージ」と答えていた．このように，ここで対象とした学生は，自分と実際に関係のない場所へは，ふるさとと認識していないことがわかった．

また，全員がふるさとがあると答えたものの，実際に「活動している」と回答した学生は全体の38%であった．なお，昨年度の同様の学生アンケートでは，この数値が8%（97人中8人）とより低かった．これは，前回は学部１年生で，今回は大学院生を対象にしたためと思われ，学年を経るにつれて，社会意識が向上し，「活動する」学生が増加するように思われるが，詳細については今後の課題である．

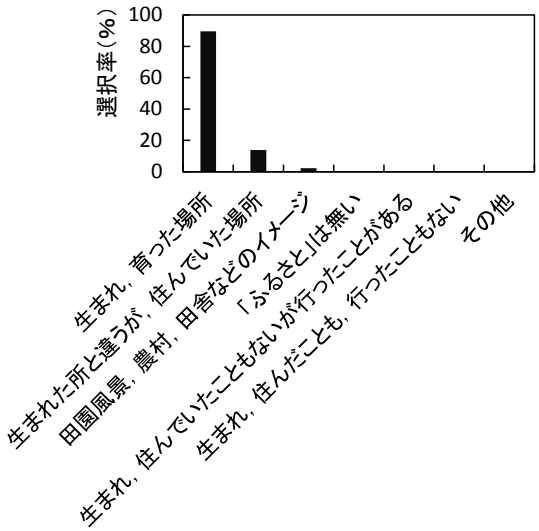



**図-1**　「ふるさと」に当てはまる定義

### (2) 「ふるさと意識」と活動意欲，活動することとの関係

まず，学生のふるさとに対しての意識（以下ふるさと意識）を明らかにするため，問9の設問「「ふるさと」と思うようになってから感じたこと」で選択されたものを使い因子分析を行った．

その結果，**表-2**に示すように，3つの因子が抽出された．得られた因子負荷量の0.5以上のものを因子の項目とすると，因子1は，ふるさとと思ってからその地域を「避けたい」，「恥ずかしい」，「貧しい」，「よそよそしい」，「孤独感」，「遠い」という項目からなり，ここではふるさとを「避けたい」と呼ぶこととした．同様に，因子2を「貢献意欲」，因子3を「リラックス」と，学生のふるさとに対する意識を3つに分類することができた．また，**表-3**の因子相関を見ると，因子1と因子2，3は逆相関となっており，「避けたい」と「リラックス」，「貢献意欲」は相反する意識であることがわかる．

**表-2**　「ふるさと」になってからの意識（0.5以上を採用）

| 項目 | 因子1 | 因子2 | 因子3 |
|---|---|---|---|
| 避けたい | 1.001 | .054 | .058 |
| 恥ずかしい | .882 | .040 | -.026 |
| 貧しい | .800 | -.178 | .160 |
| よそよそしい | .797 | .111 | -.094 |
| 孤独感 | .699 | .208 | -.186 |
| 遠い | .586 | .050 | .087 |
| 貢献したい | -.073 | .930 | -.075 |
| 活動したい | -.045 | .920 | -.110 |
| 負担したい | .298 | .658 | -.017 |
| 守りたい | -.219 | .619 | .218 |
| 責任感 | .259 | .609 | .153 |
| 落ち着く | .100 | -.158 | .994 |
| 身近 | -.030 | -.119 | .906 |
| 愛着 | -.039 | .222 | .626 |
| 仲間意識 | .041 | .263 | .596 |
| 誇り | -.033 | .269 | .400 |

**表-3**　因子相関

| 因子間の相関 | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|
| 1 | 1.000 | | |
| 2 | -0.74 | 1.000 | |
| 3 | -.536 | .415 | 1.00 |

**表-4**　因子別の相関のある項目

| 因子 | 名前 | 相関があった項目（相関係数） |
|---|---|---|
| 1 | 避けたい | なし |
| 2 | 貢献意欲 | ふるさとで就職したい(.361**)，ふるさとで暮らしたい(.379**)，ふるさとを知ってもらいたい(.515**)，ふるさとを友人に話す(.260*)，ふるさとで活動したい(.584**)，ふるさとで活動する仲間がいる(.271*)，地域の社会的活動に参加したい(.564**)，地域づくりのために活動したい(.548**)，地域のみんなと何かしたい(.438**) |
| 3 | リラックス | ふるさとで就職したい(.320**)，ふるさとで暮らしたい(.316**)，ふるさとを知ってもらいたい(.463**)，ふるさとを友人に話す(.373**) |

**.　相関係数は1%水準で有意である

*.　相関係数は5%水準で有意である

下線は，貢献意欲のみでみられた項目

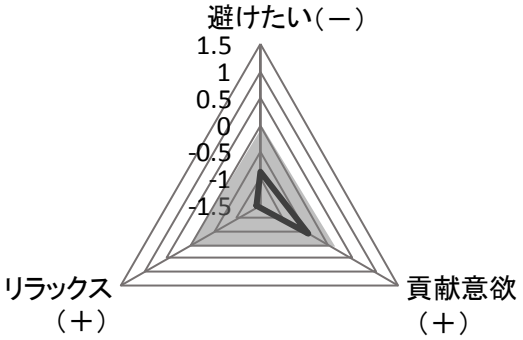
次に，ふるさと意識と行動意欲はどのような関係であるのかについて検討を行った．ふるさと意識の3つの因子得点と**表-1**にある問10～16及び問19～21の項目間で相関関係について検討した（**表-4**）．**表-4**より，因子1「避けたい」では有意に相関のある項目は無かったが，

因子2「貢献意欲」では9項目で，因子3「リラックス」では4項目との間に相関が見られた．ただし，因子3で見られた項目は全て因子2でも見られており，因子2の「貢献したい」項目のみで見られたのは，「ふるさとで活動したい」，「ふるさとで活動する仲間がいる」，「地域の社会的活動に参加したい」，「地域づくりのために活動したい」，「地域のみんなと何かしたい」と“したい”という強い意欲を示す項目であった．このように，「ふるさと」と思う地域に対して，活動したいと考える学生がいることがわかった．

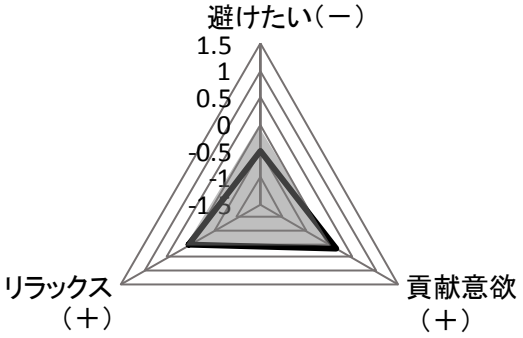
さらに，学生のふるさと意識の特徴を把握するために，個人の3つの因子の因子得点を用いて，クラスター分析を行ったところ，学生を4つのグループに分類することができた．各グループの特徴を明らかにするために，グループごとに3つの因子得点の平均点から，レーダーチャート（**図-2**）を作成した．なお，「避けたい」軸では，プラスマイナスを逆にし，マイナスほど「避けたい」ことを意味するようにし，三角形の面積が大きいほどふるさとへの意識が高いことを意味するようにした．

この結果から，**図-2**のa)グループ1はふるさとに「リラックス」を全く感じず，ふるさとを「避けたい」と感じる学生，b)グループ2は「リラックス」，「貢献意欲」も無く，「避けたい」気持ちがややある学生，c)グループ3は「避けたい」ことは全くなく，「リラックス」や「貢献意欲」が非常に高い，d)グループ4は「避けたい」ことは無く，「リラックス」を感じるものの，「貢献意欲」は4つのグループの中で最も低い学生が属している．

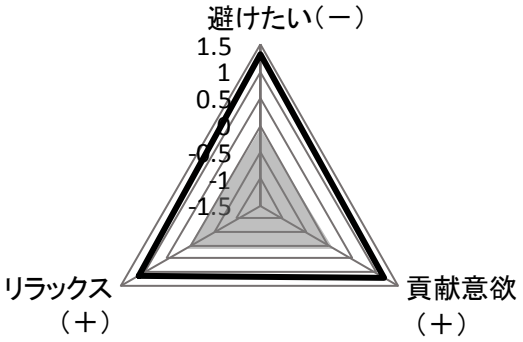
次に，各グループにふるさとのために，「活動している」学生がどの程度いるかについて，検討してみた．当初の仮説では，「活動する学生は，三角形の大きなグループ3には多くおり，三角形の小さいグループ1や2にはいない」としていた．しかし，実際には，グループ1，2にも約半数もの学生が，ふるさとのための活動を行っていた．その一方で，グループ4では最も活動する学生の割合が少なかった（**表-6**，残差分析，$p.<0.05$）．そこで，3つの因子と活動をしたいという学生の割合との関係を見ると，ふるさとを「避けたい」，「リラックス」を感じるといった因子とは関係なく，「貢献意欲」との間に相関があることが示唆された．また，因子1の避けたい，恥ずかしい，よそよそしいとふるさとのことを感じている学生でも，ふるさとのために活動しているというのは興味深い．例えば，しばらく帰らず，なじみが薄くなったふるさとで活動しているなども考えられるが，詳細は今後の課題としたい．



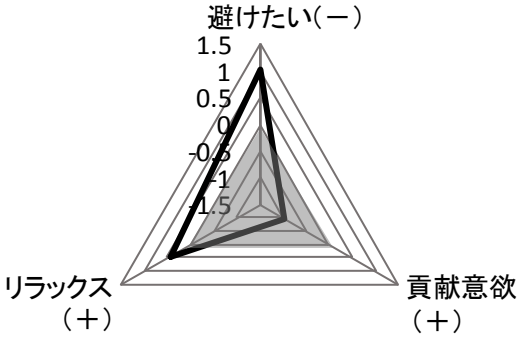

a)　グループ1：16人




b）グループ2：39人




c）グループ3：14人




d）グループ4：15人

※灰色の網掛けは0以下の値

※「避けたい」のみ値を逆転させている

**図-2**　各グループでの3つの因子得点

表-5　グループごとの活動する人の割合（活動する人：34人）

| グループ | 活動あり | 活動なし |
|---|---|---|
| 1 | 50%（8人） | 50%（8人） |
| 2 | 45%（17人） | 55%（22人） |
| 3 | 43%（6人） | 67%（8人） |
| 4 | 20%（3人） | 80%（12人） |

表-6　標準化された残差

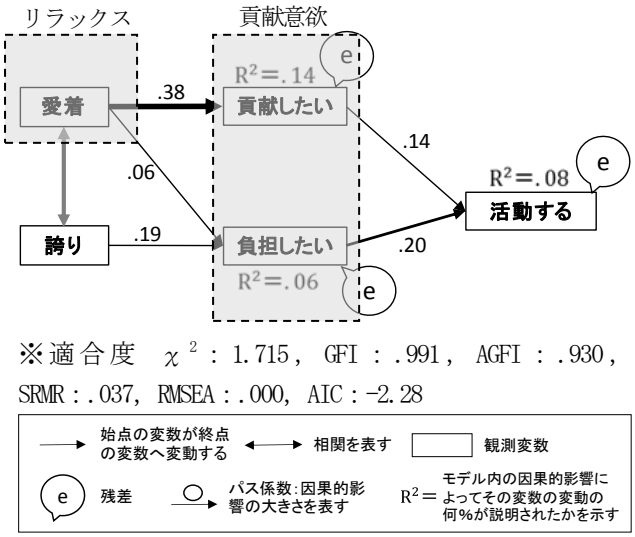
| グループ | 活動あり | 活動なし |
|---|---|---|
| 1 | 0.863 | -0.863 |
| 2 | 0.541 | -0.541 |
| 3 | 0.199 | -0.199 |
| 4 | -1.783* | 1.783* |

*：p.＜0.05（片側）

### (3) 感情と活動することとの関係

ふるさとへの感情から活動に至るまでに，どのような過程があるのかについて，検討するために，問9と問14のデータを用い，グラフィカルモデリングを行い，**図-4**のモデルを得ることができた．なお，モデルの適合度は図の下に示すとおり，基準値をすべて満たし，適合度の高いモデルと言える．

**図-4**より，「誇り」から「負担したい」へ，「愛着」からも「貢献したい」，「負担したい」へとつながり，貢献意欲が高まると，「活動する」へとつながることが表されている．

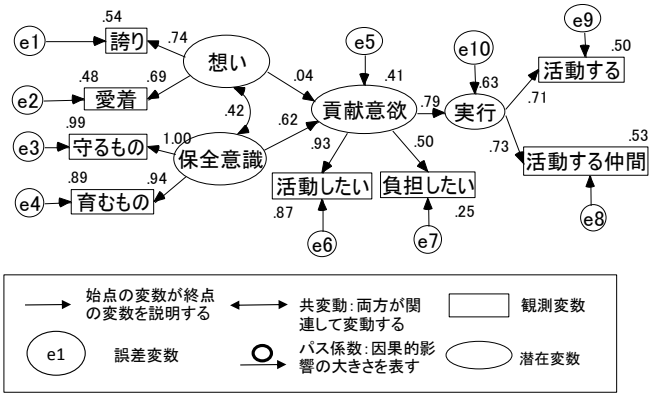



※適合度　$\chi^2$：1.715，GFI：.991，AGFI：.930，SRMR：.037，RMSEA：.000，AIC：-2.28

**図-4**　ふるさと意識から活動への構造化（N=89）

次に，**図-4**のモデルを参考に，共分散構造分析のモデルを作成した（**図-5**）．なお，適合度はRMRが有意水準から外れているが，RMSEA，GFIは有意水準を満たしているため，適合したモデルであると言える[3]．

**図-5**より，想いである「誇り」と「愛着」と保全意識である「守るもの」，「育むもの」とがお互いに作用しあっていることが伺える．さらに，想いと保全意識から貢献意欲を経て実行につながっている．これは昨年度に大学１年生を対象にしたアンケートでも同じ結果が得られており，本モデルは比較的一般性のあるものである可能性が示唆された．




※適合度　$\chi^2$：12.8，GFI：.940，AGFI：.866，RMR：.130，RMSEA：.000，AIC：52.771

**図-5**　意識から実行への行動変容（N=89）

### (5) 小結

全ての学生が「ふるさと」と言える地域を持っており，その90%の学生がそれを「生まれ育った所」であると回答していた．その「ふるさと」に対して，実際に活動しているのは全体の38%であったが，それは昨年度の大学一年生の割合に比べると高く，年次を経るにしたがって地域理解が深まり，活動する学生が増えることが示唆された．

ふるさとに対する意識の特徴を把握するために，因子分析を行ったところ，ふるさとに対して「避けたい」，「貢献意欲」，「リラックス」の3つ因子を抽出することができた．このうち，活動することと最も強い相関にあったのは，「貢献意欲」であった．このことは共分散構造分析でも昨年度と同様にモデル化され，一般性のある関係である可能性が示唆された．なお，「避けたい」意識を持つ学生でもふるさとのための活動をしていることは興味深いが，現段階ではその詳細はわからない．

また，「貢献意欲」を高める起因となる感情としては「愛着」と「誇り」が選択されており，次章からは，その「誇り」と「愛着」について検討する．

## 4．ふるさと意識と「誇り」，「愛着」の関係

### (1)「誇り」と「愛着」の定義

地域づくり関係の多くの研究では，「誇り」と「愛着」といった言葉が使われ，重要なテーマの一つであることがわかる．例えば，「歴史性を地域計画の素材とし

て活用することにより，愛着と誇りをもてる地域づくりが期待できる」（角道[4]（1997）），「シビックプライドとは市民が都市生活に感じる誇りや愛着のこと」（小野寺ら[5]（2016）），「自分の住む地域に対する誇りや愛着が希薄な住民」（羽鳥ら[6]（2015）），「人々に地域への誇りや愛着を持たせ」（鄭ら[7]（2012））とあり，両言葉は同列に扱われていることが多い．しかし，2つの言葉の意味やその認識の違いについて検討された事例は見あたらない．そこで，まず，2000年以降に出版されている国語辞典7冊から「誇り」，「愛着」を索引し，意味を調べ，その種類と辞書への掲載率をまとめた（**表-7**）．

その結果，「誇り」，「愛着」共に意味が5種類出現し，「愛着」は物や人に対する執着心のような意味にあり，「誇り」は物や人に対する名誉や自慢，自信といった意味に扱われ，同じ意味の内容は全くないことがわかった．

**表-7**　辞書での愛着，誇りの意味[8~14]

| 番号 | 誇りの意味 | 愛着の意味 |
|---|---|---|
| 1 | 名誉と感ずること 50% | 愛情にひかれて離れにくいこと 25% |
| 2 | 自慢 38% | 今まで慣れ親しんだものから離れたくないと思う心 25% |
| 3 | 誇ること 38% | 人や物に心がひかれること 25% |
| 4 | 自分の置かれた立場がやましくないと自信を抱く気持ち 25% | 自分が関係があるものに心がひかれること 25% |
| 5 | プライド 13% | 仏教で，欲望にとらわれて離れられないこと 13% |

○%は7冊中の掲載率

また，学生の「誇り」の意味の捉え方について検討するために，「誇り」の意味する言葉について質問した問1の結果を**図-6**のようにまとめた．言葉の選択率を示した**図-6**より，最も選択されたのは，「名誉に思うこと」であり，次に「自慢に思うこと」で，この順番は辞書の意味と一致していた．以後，本研究の「誇り」の意味は，名誉，自慢であると扱うことができる．

### ⑵「誇り」と「愛着」に思うもの

具体的に何を「誇り」や「愛着」と思っているのかを明らかにするため，問3と問22の結果を使い，解析を行った．**図-7**は，「誇り」と「愛着」に思うものの選択率を散布図にしたものである．なお，図中の線よりも上にあるものは，「誇り」の方が選択率が高いものである．

**図-7**より，一見して「愛着」の選択率が高いものが多く，「愛着」の方が，「誇り」よりも比較的容易に抱く感情であることがわかる．

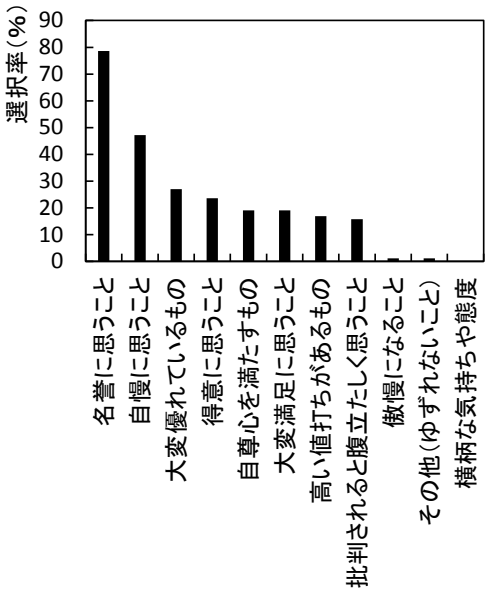
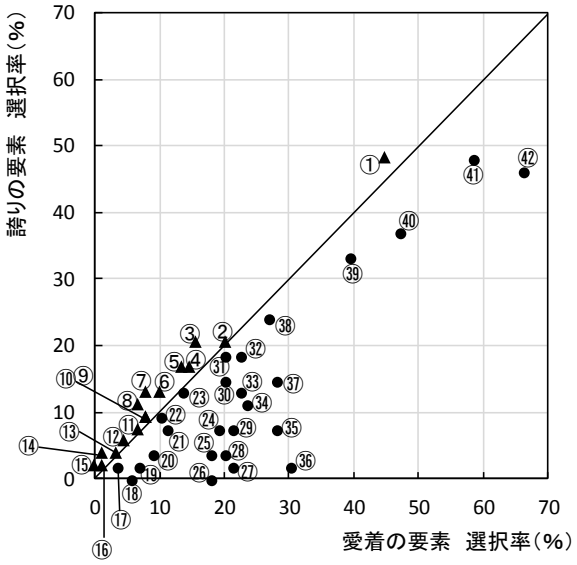



**図-6**　学生が選択した「誇り」の意味




▲：誇りが高い項目，16個　●：愛着が高い項目，26項目

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ①父母 | ⑪過去 | ⑰外部からの評価 | ㉗自然 | ㊲信頼関係 |
| ②技術 | ⑫成果 | ⑱所属団体 | ㉘風景・景色 | ㊳祖父母 |
| ③文化 | ⑬地域ブランド | ⑲未来 | ㉙住んでいた場所 | ㊴兄弟 |
| ④自分自身 | ⑭趣味 | ⑳名所・観光地 | ㉚生まれた場所 | ㊵仲間 |
| ⑤アイデンティティ | ⑮ボランティア活動 | ㉑大学 | ㉛活動 | ㊶家族 |
| ⑥伝統 | ⑯まちづくり | ㉒学校 | ㉜スポーツチーム | ㊷友人 |
| ⑦実績 | | ㉓ふるさと | ㉝先輩 | |
| ⑧歴史 | | ㉔後輩 | ㉞日本 | |
| ⑨モラル | | ㉕活気 | ㉟コミュニティ | |
| ⑩体験 | | ㉖にぎわい | ㊱食べ物 | |

**図-7**　「誇り」と「愛着」の要素での選択率

次に，**図-7**中の項目の「誇り」と「愛着」の選択率の差異を比較し，有意差のあったものを**表-8**にまとめた．

**表-8**からも，「愛着」の方が有意に選択されるものが多いことがわかる．しかし，二，三，「誇り」の方が選択率の高いものがあり，それは⑬地域ブランドと⑪過去であった．「愛着」で有意に選択されている自然や食べ物も“ここにしかない上質なもの”になれば地域を代表するブランドになる．また，過去からの歴史はその地域にしかない，地域固有の唯一無二なものである．このように，地域の特色がより強調されるとその要素は「誇り」に思われやすいことがわかる．

**表-8**　「誇り」と「愛着」での要素群の比較

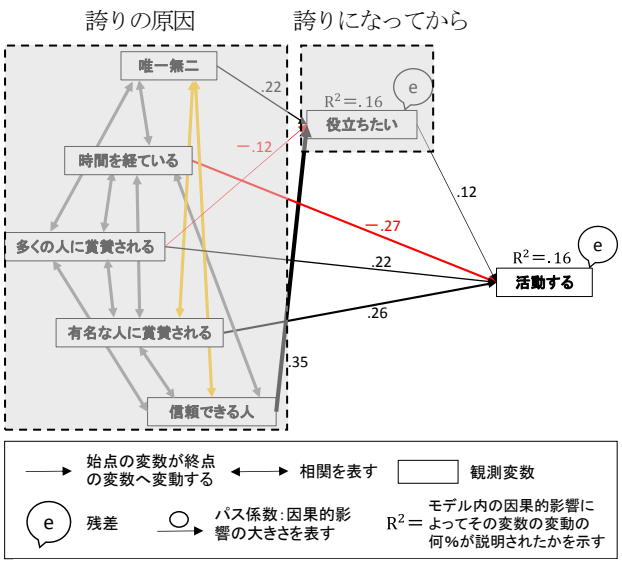
| 総称 | 誇りで選択が多い | 愛着で選択が多い |
|---|---|---|
| Ⅰ.地域資源 | ⑬地域ブランド | ㉖にぎわい，㉕活気，㉗自然，㉘風景・景色，㊱食べ物 |
| Ⅱ.コミュニティ | | ⑱所属団体，㉔後輩，㉟コミュニティ，㊲信頼関係，㊷友人 |
| Ⅲ.土地 | | ㉙住んでいた場所，㉞日本 |
| Ⅳ.時間 | ⑪過去 | |

※$\chi^2$-test p.＜0.05の要素のみ表記

※下線は「誇り」の選択率が0%の項目

### (3) 誇りから活動への構造モデル

アンケートでは，誇りの原因（問4）についても聞いており，この結果から，誇りの原因から誇りへ，さらに活動するに至る因果関係を明らかにするために，パス解析を行った．パス解析で扱った項目は，問4の他に，問5，問14である．



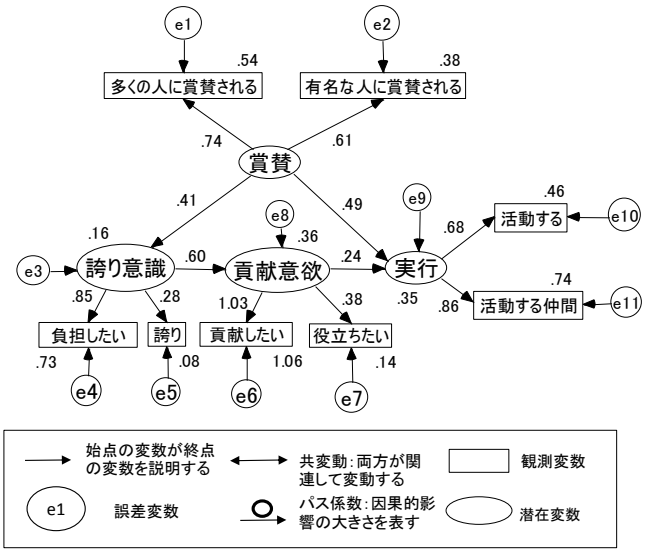

※適合度　$X^2$：0.438，GFI：.998，AGFI：.983，SRMR：.013，RMSEA：.000，AIC：-7.56

**図-8**　誇りの原因から活動への構造（N=54）

その結果，誇りの原因となるものと誇りになってから思ったこと，活動するの３つのパートから構成されたパス図（**図-8**）を得ることができた．この図から，「唯一無二でかけがえのないもの」，「その人は信頼できる人である」は，誇りに思ってから感じる「役立ちたい」という意識を向上させ，「活動する」につながることがわかる．また，「多くの人に賞賛されている」，「有名な人に賞賛されている」といった賞賛は，直接「活動する」とつながっていることは大きな特徴と思われる．なお，「長い時間を経て作られたもの」が「活動」へ，また「多くの人に賞賛される」が「役立ちたい」へとマイナスの作用があるように示された．この原因については解析上の問題とも思われるが詳細は不明である．

さらに，このパス図を参考に，共分散構造分析を行い，**図-9**のモデルを作成することが出来た．適合度は，RMRは有意水準より外れているが，RMSEA，GFIでは有意水準を満たしているため，適合モデルであると言える．この結果より，「賞賛」されると，「誇り意識」が高まり，「貢献意欲」につながって「実行」すること，「賞賛」から直接「実行」にもつながることがわかる．

「賞賛」と地域づくり活動との関係については，「村を美しくした結果として他所の人から賞賛を受けることも，住民の自発心の促進に役立っている」（国土交通省[16]（2008年））や，「他者から賞賛されることを通じて「自己」と「まち」とが切り離せないモノになっていった」（小林[17]（2017））のような報告はある．今後，「賞賛」，「誇り」，「活動」へと至るパスについて，具体的な内容をヒアリングなどの調査も行い，解析を深める予定である．




※適合度　$\chi^2$：15.6，GFI：.925，AGFI：.842，RMR：.187，RMSEA：.000，AIC：53.585

**図-9**　誇りの原因とふるさと意識から活動への構造（N=54）

### (4) 小結

一般に「誇り」と「愛着」は並列して扱われるが，その意味は全く異なり，誇りの意味は，「名誉に思うこと」，「自慢」である．また誇りに思いやすいものは，他にはない地域の特色がより強調され，ブランド化されるものであった．また「誇り」の原因となる要素から行動に至るまでの過程を，モデル化したところ，起因は賞賛されることであった．ふるさとが賞賛されることで，誇りに思う気持ちが生まれ，それが地域への貢献意欲を向上させ，ふるさとでの活動につながることを示唆することができた．

## ５．結論

大学院生へのアンケートから，その地域をふるさとにと思い，その地域への貢献意欲が向上すると行動に至ることや，その貢献意欲は，「愛着」と「誇り」によって高められることを明らかにすることができた．特に「誇り」は「愛着」ほどに容易に持たれる感情ではないが，地域の唯一無二なものは誇りに思われやすいこと，また「誇り」は賞賛が起因となっていることなどがわかった．

今後は，自分に馴染みのなかった地域を「ふるさと」と認識させる工夫についても検討していく予定である．他にも，ふるさとを「避けたい」と思う学生にの中にも，活動をしているものがおり，その詳細を明らかにする．

### 参考文献


1) 西上広貴,上月康則,山中亮一,尾野薫,平川倫:「ふるさと」の変遷とそれに対する大学生の行動変容特性について,景観・デザイン研究講演集,No.12, pp.200-207, 2016
2) 小島隆矢，山本将史：Excelで共分散構造分析とグラフィカルモデリング，pp.1-15，株式会社オーム社，2013
3) 上田翔，八木田浩史：グラフィカルモデリングを用いた環境用語による発信情報の構造解析，Journal of the Japan Institute of Energy,Vol.94,No,4,pp.327-334, 2015
4) 角道弘文：溜池の歴史性認識の地域的意義とその活用，農業土木学会誌，第65巻，第12号，pp.59-63，1997
5) 小野寺夏海，野田佳穂莉，安武伸朗：シビックプライドの種を市民の行動の中に見出す手法，日本デザイン学会研究発表大会概要集，63(0)，257,pp.514-515，2016
6) 羽鳥剛史，片岡由香，牧野太亮：住民参加型・回覧型「思い出マップ」によるシビックプライド醸成策に関する研究，都市計画論文集，Vol.50,No.3，pp.445-450，2015
7) 鄭 蝦榮，松島 格也，小林 潔司：アイデンティティと過疎中山間地域におけるおつきあい行動－日南町を事例に－，土木学会論文集D3，Vol.68，No.5，pp.I_499-I_511，2012
8) 北口克彦:新明解国語辞典 第七版，三省堂,2012
9) 山口昭男:日本語　語感の辞典，岩波書店,2010
10) 山口昭男:岩波国語辞典　第7版，岩波書店,2009
11) 山口昭男:広辞苑　第6版，岩波書店,2008
12) 佐藤宏:精選版　日本国語大辞典　第一巻，小学館,2006
13) 五味敏雄:新明解国語辞典　第六版，三省堂,2005
14) 五味敏雄:三省堂国語辞典　第五版，三省堂,2001
15) 石川隆行:児童が誇りを喚起される状況についての検討,研究紀要，第40集，pp.26-31，2010
16) 新潟県上越市:村格・都市格の形成（郷土の誇りを育てるまちづくり）に向けた推進方策調査報告書，平成19年度国土施策創発調査，国土交通省北陸地方整備局，pp.93-140，2008
17) 小林英俊:CBT成功への道：長崎さるく研究より，CATS Library,11,pp.91-97,2017
18) 安部晋吾，高木修：自己愛傾向が援助行動に及ぼす影響,関西大学社会学部紀要，42（2），pp.65-73，2011
19) 有光興記：誇りの経験的定義日本心理学会第71回大会発表論文集，p.926，2007